

2015年印刷学会秋期セミナー印象記

祖田 信之*

Nobuyuki SODA*

平成27年10月16日(金)大日本スクリーン製造(株) 門前仲町事業所(ホワイトキャンパス MON-NAKA)において、「元気印の印刷会社になろう」と題して、(一社)日本印刷学会による2015年秋期セミナーが開催された。小雨降りしきる中、印刷会社、関連メーカーなどのメンバーを中心に昨年を上回る80名近い方々にご参加を頂いた(写真1)。以下にその内容と私見ではあるがその印象をまとめる。



写真1 会場風景

1. デジタル後加工技術の基礎と最新動向

ライター・レイター 山下潤一郎氏

先般、開催されたIGAS2015でもここ数年のデジタル印刷機の普及に呼応するかのようにデジタル後加工機の出展が目立った事は記憶に新しい。デジタル印刷機の普及が思うように進まない中、山下氏は「印刷会社が受注できるデジタル印刷の仕事は所有している後加工機で決まる」と言う。これは単にオフセット印刷機の代用としてデジタル印刷機を導入するだけでは片手落ちである、というものである。従来、印刷物を納品したら完了という請け負い産業で

あった印刷業界が元気になる為には、積極的にお客様にアプローチし、様々な体験を与えてお客様と継続的に「つながる」工夫をする必要があるとコメントがあった。様々な後加工機が登場する中、何を選択すべきかはやはりお客様目線でお客様の為の提案を考える事であることを再認識した。

2. 付加価値を生むデジタル後加工技術

コニカミノルタビジネスソリューションズ(株)
荒井純一氏

先の山下氏の講演を受けて、具体的な後加工機の紹介が続いた。全体俯瞰をする講演の後に具定例を挙げるセミナー構成は大変分かりやすい物であった。荒井氏から紹介のあった製品はデジタルニス加工機とデジタル箔押し機である。ここでもただ機械を導入すれば上手く行く訳ではなく、機械を上手に使いこなすコツをお客様に提案してお客様と一緒に考える事が重要、というコメントがあった。まさに山下氏の講演の具体的な事例となり臨場感溢れた講演であった。

3. デジタルシステム「SCOODIX」によるプレミアム小ロット対応の概要と事例

(有)ゲイン 杉山伸一氏

杉山氏の講演もデジタルニス加工、デジタル箔押し機の紹介でありこちらも数多くの実技サンプルが添えられ非常に現実味のある講演であった。荒井氏の講演でも触れられていたが、これらの後加工機を活用する事で高付加価値印刷を展開できるという事であった。低価格競争で苦しむ印刷業界が元気になる為のヒントである事は間違いないが、一方で従来の設備産業のように設備を導入すれば儲かるという訳ではなく、活かすも殺すもアイデア次第という事が示唆された。

4. ラクスの創る印刷通販の未来

ラクス(株) 松本恭攝氏

「仕組みを変えれば世界はもっとよくなる」をキャッチフレーズに急成長を続けるラクスの松本氏によれば印刷

*富士フィルムグローバルグラフィックシステムズ(株) デジタルプレス技術部
(〒106-0031 東京都港区西麻布 2-26-30 富士フィルム西麻布ビル)

業界はまだまだチャンスのある業界という。長年に渡り印刷業界に身を置き、苛烈な低価格競争を目の当たりにしている小生にとっては、まさに目から鱗といった講演であった。成功のからくりは書籍販売で成功した Amazon のロングテール戦略を印刷業界に導入した事であった。既存のジョブを奪い合う訳ではなく、潜在的なニーズを掘り起こし新たな需要を増やす事に貢献をしており、松本氏のまだまだチャンスのある業界という言葉にも納得である。お客様にとって印刷物を作る事は手段であって目的ではない。お客様が目的を達成する為のソリューションが重要と午前中の講演に続きここでもお客様目線の重要性が語られる事となり、本秋期セミナーのキーワードの一つであると感じた。

5. IGAS2015 に見る drupa2016 の動向

ジーエーシティ (株) 堀本邦芳氏

世界最大の印刷展示会 drupa を翌年に控えた IGAS は、大きな新製品発表は少ないとされている。そんな中、商業印刷分野から周辺印刷分野への広がり、インクジェット印刷機の着実な進化、デジタル後加工機の進展が各項目に整理されて紹介された。個人的な意見ではあるが海外出張の為、IGAS 会場を訪れる事が出来なかった小生にとっては非常にありがたい講演であった。また講演後半では小森コーポレーション様のご協力もあり、Landa の最新状況についても報告がなされた。実サンプルの展示は無かったものの、初出展の drupa2012 から格段に完成度が上がっている事がサンプル写真にて窺えた。いずれにせよ、来年の drupa2016 への期待を膨らませる講演であった。

6. インクジェット用紙のトレンド

三菱製紙 (株) 木村篤樹氏

インクジェット印刷機の普及が進む中、ユーザーはコストと種類の豊富さから普通紙を使用したいと言う。しかし

木村氏は『普通紙』というのは『オフセット印刷専用紙』なのだと言う。活版印刷、グラビア印刷を含め各印刷方式に必要な用紙特性を分かりやすくご説明頂き、世の中の印刷のほとんどがオフセット印刷であるがゆえに『オフセット印刷専用紙=普通紙』と固定概念化されてしまっていた事に改めて気付かされた。オフセット印刷が世に現れて以来 110 余年を掛けて最適化されてきたオフセット印刷専用紙がインクジェット方式の印刷に向かない事は理解できるが、使う側からするとオフセット専用紙のコストと選択肢の多さが魅力的である事も事実である。用紙メーカーによるこれからの対応に期待をしたい。

7. 高解像度モニタを用いた未来のプルーフ

EIZO (株) 山口省一氏

大日本印刷 (株) 杉山徹氏

最後の講演はモニターメーカーと使用者側の両側面からの講演となった。モニターメーカーからは、液晶モニタの技術変遷と昨今ようやく AdobeRGB 対応の 4K モニタがリリースされた旨の紹介があった。使う側の意見としては画像、文字ともにモニタプルーフを可能にする環境が揃った事が報告された。小生の記憶では、DTP 化や CTP 化等のデジタル化が一気に広まったのに対して、モニタプルーフは写真画像の品質チェックから始まり 20 年近くが経っており、随分と時間が掛かっている感がある。杉山氏から紹介のあったオンライン校正支援システムのようなソフト面の充実が普及の鍵になると感じた。

終わりに

今もデジタル化の技術は着実に進歩をしている。元気印の印刷会社になる為には、設備導入だけでなくお客様目線でお客様と一緒に考える事の必要性を感じるセミナーであった。